イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　154号

巻頭言　アシュラムの目指すもの

杉田　常夫

スタンレー・ジョーンズ博士は、使徒言行録に記されている交わりを、現在の教会に取り戻したいという願いから、アシュラム運動を始めたと語っています。使徒言行録2章42節は、最初の教会の様子を、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」と、伝えています。

「使徒の教え」と、「祈ること」はアシュラムが最も強調していることです。これなしに教会の交わりは成り立ちません。「使徒の教え」は旧新約聖書に基づく教えですが、新約聖書はまだ書かれていなくて、使徒たちの証言に基づく教えでした。「祈り」はみ言葉を聞くとき、それに対する応答として生まれます。祈りは神との会話であり、神が語られる言葉に、人間が応える第二の言葉です。よく聞かなければ祈りは、独りごとになってしまいます。

次に「相互の交わり」と、「パンを裂くこと」は、アシュラムが取り戻したいと願っている、教会の交わりです。信者たちは家ごとに集まって「パンを裂き」、仲間との共同の食事をしました。用意してきた食物を分け合って食べ、互いの交わりが深められました。その食事の席で「主の晩餐」もまもられたようです。それによって兄弟姉妹の絆が、更に固くされました。

また、信仰と愛にみたされた原始エルサレム教会では、生活に困窮している仲間に、喜んで援助の手を差し伸べました。持っている余分の財産を処分して、貧しい仲間のために捧げて、必要としている人々に分け与えられました。これは強制されたのではなく、仲間への愛による自発的な行為でした。

私たちが毎年アシュラム集会に参加するのは、日ごろの多忙な生活の場から離れて、聖書と祈りに集中して、信仰生活をリフレッシュされたいと願うからです。日ごとに聖書からみ言葉を聞き、祈りに努めている方々はその恵みを証しして、参加者を励ましていただきたいと思います。アシュラムで体験した交わりで、教会生活がどのように変えられたかを聞き、感謝を分かち合いたいと願っています。

（元日本基督教団香里教会牧師）

霊想

「御霊によって歩む」
ガラテヤの手紙5の25

元住吉キリスト教会
牧師　木部　安来

聖書は霊の導きに従ってまた前進しましょう。と命令して、祝福を約束しています。

「クリスチャン・アシュラムの原則と実際」を書いたスタンレー・ジョーンズ師は、「平和と祈り」の運動を始められ、来日四回目の、一九五五年以来の主題は「祈祷」でした。「祈祷」はクリスチャン・アシュラム運動の不変不動の行動の源泉でした。

クリスチャン・アシュラム運動の集会が祝福され、多くの恵みを受けたのは実に聖霊の働きでした。

聖霊を求め歩むためには、聖書を通して語りなさる御霊の導きに聴き従わなくてはなりません。

聖霊に従って歩み、歩調を合わせて歩まなくてはなりません。私たちが神の摂理によって来る全ての事に従う時に勝利が与えられます。

私たちが聖霊と歩むためには聖霊によって聖別されなければなりません。

聖霊を受けた人は、「キリストイエス」にある命の御霊の法則は、私たちの罪と死との法則からあなたを解放したからです」(ロマ8の2)

御霊によって歩むとは、私たちの中に住まわれた方として御霊を認識することです。信頼して、寄り頼み相談することです。そして御霊がお語りくださる時には従わなくてはならないのです。従って歩む時に罪からはなれて喜びが与えられ、救いを確実にします。

そのようにして、私たちの生活は常に戦闘の備えによって思想と生活が悪を排除して、「ただ神のみ」という栄光ある自覚に深められていきます。そして、私たちの生活は愉快な、静けさが与えられ、私たちに係る神のみ旨のすべてを成就しながら、神が命じ、望みなさることをすることができます。

「御霊を消すな」(Ⅰテモテ五の19)

「詩と賛美の霊的な歌によって語り合い、主に向って心からほめ歌いなさい」(エフェソ五の19)

私たちは聖霊の働きを妨げ、働きなさる御霊を消すことがあります。

聖霊が人を通してお語りくださるのを静止し、証言の自由を拒否圧迫し、聖霊を押し出したり、制したり、自由の働きのない、儀式の形式的態度、又、あまりにも理知的な冷淡さ、御霊の喜ばれぬ題目のメッセージ、議論等々は御霊の働きに対する致命的障害です。

スタンレー・ジョーンズは、賀川豊彦に、「祈りとは何んでしょうか」と尋ねました。賀川は「一言で言えば「明け渡し」です」と答えました。これは、キリストの御人格と、彼の支配し給う神の国への明け渡しであり、これは彼と彼の御国に対して同一の態度を取ることです。この路線に祈りを合わせることによって、あなたは究極の御人格、秩序、及び究極の力に結ばれることになります」と勧めています。

「あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」(ルカ11の13)

信者が要求するなら、その最高の賜物の聖霊を与えて下さると約束され、私たちが最も必要とするところに与えてくださいます。自我、肉なる潜在意識の中にも、肉の思いと、霊との間の戦いに必要な聖霊が与えられ、自我、自己的な欲望を聖別し、神の国へと献身させて下さいます。

聖霊は、相対的な、多様な価値観や、反社会的な、非合法的な行動を識別させ、解放し、神の国という真理に導き結びつけてくださいます。

私たちは揺れる世界の中で動揺する魂です。聖霊は、私たちの衝動を取り払ってしまうのでなく、また、私たちの個性、又は人間性を失わせるのでもなく、私たちを清め、調整し、そして、これらの衝動を聖化し、私たちを一定不変の人格へと作りあげて下さるのです。聖霊は私たちの良心と隠され潜んでいる意識、理性を委託されていて、私たちの世話をしておられるのです。そして、世話をしている人に、聖霊は権限を与えるのです。(Ⅱテサロニケ1の11～12)

「……私たちは、父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます。」

立証

イエスは主である

東京新生教会会員
吉田　清江

「聖霊の働きがなければ」の主題の許におこなわれた〝第46回関東アシュラム〟には私の今の状況ではとても参加は無理だと諦めておりましたが、込み上げて来る切望を憐みの主は叶えてくださいました。マルコ12：44のやもめの献金の聖言『…乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。』が、どういう訳か頭をよぎり直前になって決めました。懐かしい箱根山荘では何回もお会いした祈りの仲間と再会を喜びあいました。肩書など一切無しであり、神の前に罪赦された僕に過ぎない者として全く平等の自由な集まりです。言葉を越えて既に聖霊の御働きの中に置かれている私共でした。不思議な程の平安と喜びの中に開会礼拝が行われエマオ途上のイエス様（ルカ24・13～35）が取り次がれました。「二人の弟子にイエスご自身が近付いて来られ、こんなに間近におられるのに目が遮られていてイエスだとは分からなかった心の鈍い者を、イエス様はお責めにならないで共に歩んでくださり、弟子の家に入られて食卓につかれた一連の事を通し、客の立場である筈のイエス様がここではマスターの立場となっておられるのです。この愛の主に私共は悔い改めつつ近づくのがアシュラムであります。再び帰って行く所は暗い所、問題の多い所であっても、主が共におられるなら光を携えて行こう。アシュラムの終わりまで「主よ共に在ませ。」と。続くオリエンテーションでは初参加の方々のために五原則が説かれ〝ここで神の国を体験し、持ち帰り、神の国を伝えよう〟と勧められ、開心の時には〝隔てを取り除き、ここに来るにあたって何を求めているかを、イエス様に求めよ〟等など恵み豊に語られました。更に主との一対一の連鎖祈祷、心開かれた祈りの細胞、賛美と証し、種々備えられた時を経て、最後の充満の時となりました。カナの婚礼（ヨハネ2・1～10）にイエス様と母マリアとの間で交わされた言葉の中にその信仰を知らされました。「ぶどう酒がなくなりました。」とイエス様に訴えた母マリアは主が最善の時に最善のものを出してくださる事を、信じ待ち望んだのです。〝この姿勢が大切なのである〟と語られました。私も主の最善を待ち望む信仰でありたい！と願います。温かい素晴らしい食事にも恵まれ、更に一年間のお互いのための祈りを約束し、共に喜びに満たされたアシュラムでした。『…聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか。』（ルカ24・32）『あなたの庭で過ごす一日は、千日にまさる恵です。』（詩84・11）感謝しつつ、栄光主にあれ！

第42回 関西アシュラム報告

脇田　慎一

二〇〇八年一〇月一二日（日）午後四時～一三日（月）午後二時三〇分、神戸市東灘区御影町の「母の家ベテル」で、第四二回関西アシュラムが開催された。定刻までにほぼ全員が揃って、開会の祈りの時を迎えた。参加は一〇教会、二十二名（信徒十一名、教職一〇名）でした。主題は「神の国の体験と献身」、主題聖句は「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ。」（ルカ福音書一七章二一節）である。「開会の祈り」は杉田常夫師が担当し、一三日（月）「朝の祈り」は辻中昭一師が担当して下さった。今回は特別に助言者として後宮俊夫師（日基教団甲西教会）を招き、同師が「開心の時」「福音の時」「静聴・分ち合いの時」「充満の時」をすべて担当してくださった。

今回の助言者から指摘されたのは、日本から台湾等へ行かれた一部のアシュラム指導者が、アシュラムとはこうこういうものであると説明し、現地の方々はその説明を聞いて、アシュラムとはその説明者の言う通りであると理解しておられる。しかし、本来のアシュラムはそうした説明とは異なるところが多々ある。

現在アシュラムに関わる人々は、スタンレージョーンズ兄弟の唱導された、本来のアシュラムに帰る必要がある。

助言者は本来のアシュラムに立って、長き時間に亘り、ご指導をして戴き、参加者はアシュラムの働きに深い信仰の恵を戴いた。

また、一日目の夜、「福音の時」の終了後、助言者との個人的な懇談の機会が与えられ、個人的に参加者の多くが信仰上の種々の問題について、助言者より多くの示唆に富んだ有益なアドバイスを戴くことが出来た。

第43回 九州アシュラム報告

事務局　岡山　敦彦

18年9月22～23日、福岡黙想の家（宗像市）で43回目の九州アシュラムを開催することができました。毎回、何人の方が集まってくださるか、事務局にとっては大きな祈りの課題であります。今回は28名の祈りの勇士が集まってくださり、心から主に感謝しました。主は何時も選ばれた人たちを備えていてくださることを改めて教えられました。

今回の助言者は日高範嘉先生（熊本市　愛泉祈祷院院主）でした。先生には3回連続で助言者の奉仕をお引き受けいただきました。先生は祈りの人であります。日高師は台湾に宣教師として奉仕されていた時にアシュラムに参加され、それ以来熱心にこの働きを続けて来られました。台湾では「愛修会」と呼ばれているそうで、宣教師としての働きを終えて、帰国されてからも、熊本に祈祷院を作られ、毎年「熊本ヴィタノヴァ愛修会」を開催されています。また、先生は「ヤベツの祈り」の実践者であります。一時、この祈りがブームになったことがありました。先生は今も、このヤベツの祈りの素晴らしさを、熱く語ってくださるばかりか、御自分の生活の中でその恵みを証しされ、私たちもぜひ実践するように励ましてくださいます。主がこのような助言者を備えてくださっていることこそ、主が私たちを大いに祝福してくださっている証しです。

九州アシュラムでもう一人忘れてはならないお方、鍋倉勲先生（委員長）です。先生は、スタンレー・ジョーンズ先生が日本を巡回されておられた時、通訳の奉仕をされ寝起きを共にされました。その時のことをお話くださる時、お会いしたことのないスタンレー先生を想像することができます。一昨年、夏海夫人を主のもとに送られ、ご自身も癌を患われましたが、今は元気に奉仕してくださっています。

このような先生方に支えられ、参加者の喜びの声に励まされて、九州アシュラムは続けられています。

御国を来らせ給え

（No.149より続く）

神の国についての概観

D・Pタイタス（インド）

(2)ヘブル語のマレクース（詩103・19、145・13等々）は神の国又は支配を意味する。ギリシャ語のバシレイアは神の国のことである。

神の国も天国も同じ意味でマタイ福音書においては天が用いられている。それは神聖について語る場合のユダヤ的態度であったからである。ルカ福音書は神の国を一般的に用いられている。異邦人達が天をそのような意味には理解しなかったからである。次の比較は両者が同一であることを確証するだろう。マタイ4の23、9の35とマルコ1の14。マタイ10の7とルカ9の2。マタイ5の3、10とルカ6の20とロマ14の17。マタイ11の11とルカ7の28。マルコIの15とマタイ4の17。マタイ13の11とルカ8の10等。大変理解しやすい意味を持っている。神の国はこの研究が示すように、神の国の法則は単に精神的なもののみならず、全宇宙と全社会を倫理的、政治的また経済的に支配しているものである。（ロマ14・17）即ち「神の国は飲食でなく、義と平和と聖霊における喜びである」。

各地区アシュラム予告

●第40回城北アシュラム
とき　'09年2月11日(水)
午前10時より午後4時45分
ところ　日本ホーリネス池の上教会

●第16回東京新生教会アシュラム
とき　'09年2月21日(土)～22日(日)
ところ　日本基督教団東京新生教会
立証・沼津シオンキリスト教会員
堀内　稔兄

各地区アシュラムの上に祝福を祈りつつ（Y.）

〒一八一―〇〇三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇一〇〇―一四五五八
理事長　大石嗣郎